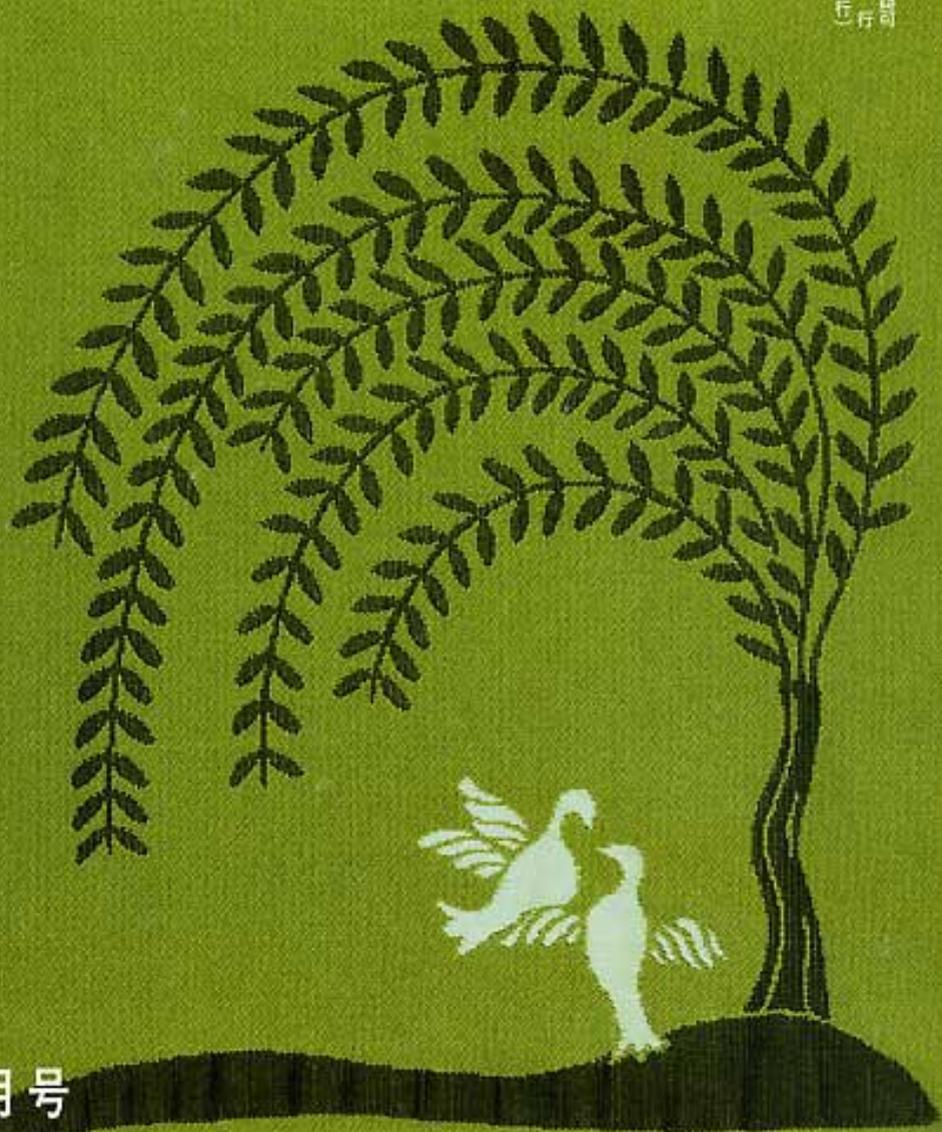


京鹿子

昭和二十三年六月廿一日第三種郵便物認可
平成二十一年三月一日発行
通巻一〇〇三号六號月一回一日発行



3月号

— 近 詠 —

成人の日 丸山佳子

むつかしいことこれにて山眠る

世の中がいかに変わると事始

養生訓きかぬふりして花八つ手

新しい春に逢へさう青信号





門松の前を太郎冠者の歩で
恵方道に詠んではならぬ物もある
このニユース冬將軍はいまどこに
道なくて何がこの世ぞ寒たんぽぽ
お人柄と冬至ビールに胸襟を
成人の日餅つき空手の練習部

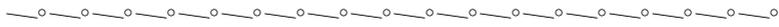


豊 田 都 峰

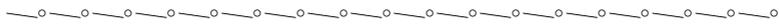
清響集 その八十三

寒 星 の い の 一 番 を 得 し 父 郷
初 詣 今 年 も お 礼 と い ふ こ と で
一 笛 に た ち ま ち 獅 子 の 舞 姿
獅 子 舞 の ま づ 大 空 を 噛 み に け り
獅 子 頭 そ の 前 足 の や さ し か り
枯 木 立 遠 近 法 の 日 和 可 かな





朝	枝	雪	雪	雪	雪	雪	樹
明	枝	し	し	の	の	の	氷
の	に	づ	づ	敷	来	来	林
稜	雪	く	れ	く	て	て	朝
線	の	灯	し	宮	鉾	茅	湖
産	だ	の	づ	道	杉	葺	を
毛	ん	漏	れ	風	た	く	後
め	ご	る	を	の	ち	里	背
く	の	納	さ	三	の	の	に
芽	五	屋	そ	筋	行	昼	
木	つ	の	ひ	ほ	儀	と	
ら	六	北	杉	ど	よ	も	
	つ	庇	林		さ	し	



秀華採集

茶の花やわれに後れしわれに会ふ

井上 菜摘子

茶の花は静かに思いを呼ぶ、「われに後れしわれ」すなわちまだ自分ではない
吾、待ち望んでいた吾かも知れない、そんな「われ」に出会えた、茶の花のため
に、といったところ。覗きこんだ自分をうまく描いている。

深秋をおしはかるかに燭揺るる

村田 富美子

風神は琳派か紅葉吹き上ぐる

伊藤 希眸

前句の蠟燭の揺れの誘い、後句の「琳派」なる風神の浮かび上がらせ方に非凡
なものを感じる。

鈴鹿 仁

をんな神

冴ゆる日の真昼の重さ翳つくる
風花や草書ときめく文ありて
氷るには神のあそびの手水鉢
雪催からすひと声悔こぼす
らふばいの風のささやきをんな神
寒明の樹々にも恵み翳ふやす

山下臺華氏追悼

冬の夜の君亡き闇の中にゐる

近 詠

宇都宮滴水

うそ二つ

遅ざくら暗示解かれてヒトと成る
蛇穴を出すすぎて穴をかへりみる
畦の木の芽吹きを囁すはぐれ鳥
波ごとに夏をいざなふ渡し舟
うそ二つ噛み合つてゐる青やなぎ
産ぶ声の届く早さや青峠
積ん読のうへ下変へて涼を呼ぶ

神麓集



三国港 山田をがたま
候不順紅葉いまだし北陸路
九頭竜川海へ溶け入り秋の潮
冬ざるる河口に紡ふ漁船小さき
待望の入り陽しぐれの雲隠す
九頭竜の対岸灯り日の短か

水の音 竹貫 示 虹

さよならのはじめは春の水の音
どの水もつめたからむに雁帰る
春潮の音生む茶釜たぎらして
押入れに亡き妻のゐる彼岸入り
春の雲山陰線がしやべり出す

冬の星 荻野 千枝

冬銀河無限の光ふりこぼす
セピア彩の孤愁の涯寒の星
貝殻を脱がせてよりの牡蠣の糶
天国と地獄のはざまに秘む懐炬
きらめきをかぐやよ護れ冬の星

面影の人 北川 孝子
ほきほきと御苑素通る空つ風
去りがての粋なひと言ひよんの実
面影の人も老いくる夜の懐炬
風紋の際立つ紅葉月夜かな
素直・強情うすうす見せて枯れはじむ

高木 智

窓小春胸のつかえを払ふべし
外泊の自宅へ急ぐ時雨虹
古老柿の木成りの味の誠かな
手づからに摘みしと蜜柑甘かりし
一個づつ名あり林檎は王者たり

冬花火 柴田 朱美

冬花火ずつと他人でゐるつもり
耐えてゐる事に意味あり冬花火
冬花火背中の故郷軽くなり
虚空おそらに憂うれひを残す冬花火
冬花火城が小さく沈みたり



斜張橋

森津

三郎

唐船が渚のあたりのわるなすび
犬散歩帰り秋のネクタイす
入口にとがらし生けてけぢめとす
一人行く数へ切れない小春かな
立冬の斜張橋を島へせく

討入の日

川崎光一郎

雨あがり討入の日を街ぞめく
息白く義士行列の出立す
いつせいに白足袋動く義士の列
義士の日のタレント義士の笑顔かな
義士の関ひびく小春の播磨灘

秋惜しむ

船越

美喜

銀杏散る隠すものもう何もなし
かくありて世代交替落葉踏む
人の背に秋惜しむ影濃くありて
夕紅葉池に映りてことさらに
十二月追はれどほしのおのが影

奥村

鷹尾

山茶花の虫にも負けず花芽吹く
晩秋の生駒連山朱に沈む
猫嫌ひの主犬飼ひ冬野駆く
佐保堤桜と言へど枯葉溜め
ずつしりと収穫重し案山子捨つ

連れ雀

森津

三郎

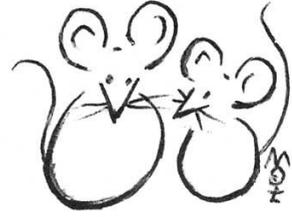
山茶花の垣に白がぼつぼつと
朝焼けに冬の鴉の甘え鳴く
吹いてゐる風を追ひこす破れ落葉
南天の実は重たげに曇らせる
柿の木の鴉を追へる連れ雀

絵柄

伊藤

希眸

小路出て絵になつてゐる枯の街
枯の中窯出し絵皿朱を積めり
百号の絵に落葉道入り迷ふ
倦む絵本咳く渦の待合室
秩父夜祭空の絵柄になつてゐる



京鹿子集

豊田都峰選

風の涯人数が合はぬなり

茶の花やわれを後れしわれに会ふ

落葉踏むわが身のどこか踏んでゐる

杉落葉もどる標の失せてをり

週明けのメール白鳥が来てをり

ふる里の合鍵雪に埋めありし

雪女郎然るに種火ふところに

深秋をおしはかるかに燭揺るる

ときをりはつじつま合はすかいづぶり

六波羅蜜風が影追ふ空也の忌

亀岡 井上菜摘子

京都 村田富美子

鴉鳴いて藍絵の富士の低さかな

十指よりこぼる夜語りシヨール編む

韋駄天に加速つきたり山に雪

灯明のやうに麓の冬ざくら

風神は琳派か紅葉吹き上げる

冬夕映え闇の狭間に広がりにて

砂漠の地束の間の冬楽しみて

渡り鳥避寒地訪ねる人多き

人の幸祈る挨拶クリスマス

クリスマス郷土料理を持ち寄りて

千葉 伊藤 希眸

アリソナ 伊吹 之博